

『今昔物語集』の三韓

宮 田 尚

「今昔物語集」は天竺、震旦、本朝の三部よりなっており、天竺、震旦の両部には、それぞれ一八〇話を越えるはなしが収められている。

それに対して百済、新羅、高麗の三国には、独立した部立があたえられていないばかりか、関係話もごくかぎられている。「百済河」「高麗端ノ疊」などの語を有するものや、国名が出ているだけのものまですべてふくめても、わずか三十話。三韓に連なる人物が主人公、ないしそれに準ずるかたちではなしにかかわっているものはとなると、おおく見積もっても六話ないし七話程度をかぞえるにすぎない。

この片寄り、とりわけ三韓の比重の軽さは、詮ずるところ、「今昔物語集」の成立にいたる時代状況、および、そのなかで醸成されていった編者の自国意識、さらには編集に際しての資料上の制約等が、それぞれわかちがたくからまりあいながら作用していることによるものようだ。

「今昔物語集」の三韓

本題に入るまえに、三韓関係話を概観しておきたい。
まず、三十話の国別内訳はつぎのとおり。

〈百済〉

十一 1・16・22、十二 3、十四 32、十六 2、十七 18、十九 30、二十四 5 (計九話)

〈新羅〉

六 30・36、十一 1・4・15、十四 45、十六 19、二十九 31 (計八話)

〈高麗〉

十一、十一 1・6、十二 9・10・22、十四 28、十六 1、十七 33、十九 31、二十二 7、二十四 31、三十一 2・21・30 (計一五話)

一見してあきらかなように、新羅の六 30・36および高麗の十一のほかは、本朝部に収められている。話数が少ないことに加え、大部分が本朝部に収められていることは、三韓関係話の留意すべき傾向だといつてよいだろう。

なお、六 30と十一とは、旅の目的地として国名が提示されているにすぎない。

三韓関係話の延べ数が三二話になるのは、十一一が百済、新羅、高麗の三か国と重複することによる。

十一一は本朝部の冒頭に位置し、仏教の日本への初伝をはじめとする伝来と定着のしだいと、聖徳太子を軸にしてまとめられた。ここに三韓が競合することに象徴的に示されているように、多かれ少なかれ、各国はいずれも、仏教の伝来と定着とにかかわるはなしをふくんでいる。

たとえば百済は、九話のうち十一一・22、十二三、十四32、十九30の五話がそうだ。これらは、直接、仏教の伝来と定着とにかかわっている。このうち十二三、十四32、十九30の三話は、主人公ないしそれに準ずるかたちで、渡来の百済人がはなしのなかの主要な位置をしめている。

かかわりかたが間接的なばあいもある。十一六、十六二の両話がそうだ。前者は、百済河のほとりに移築して百済寺と改称した寺が、数次の変転の後に大安寺となったことを内容としており、後者は、百済の滅亡に際して派遣された日本人が、無事に生還できたことをよるこんだばかりか、子孫々に至るまでひたすら観音に帰依したことを内容としている。百済のかかわりかたはゆるやかだが、これらも、伝来定着史の一端をなっているといつてよいだろう。

ほかに、備中国の老僧の俗姓が百済の氏であったことを伝えるだけの一七18や、絵師の名を百済川成だとする二四5のように、はなしの主題とかかわりあわない〈百済〉も一部にあるが、総じて百済関係話は、仏教の伝来と定着とにかかわるものであることを特色としている。

新羅も、靈験のあかしとしての六36や、伝来・定着に関するはなしとしての十一一・4・15などをそなえており、そのうち六36、十一15の両話は、新羅人がはなしのなかで主要な位置をしめている。また、唐へ留学中の日本僧が新羅を訪問したとする記事をふくむ十一4のような、新羅人の直接かかわりをもたない伝法・定着譚もあるなど、百済のばあいに通じる側面をもっている。

しかし、その一方において、新羅関係話のなかには、日本と新羅との拮抗を内容とする十四45や、日本の観音の靈験で新羅後の苦難が救われたとする十六19などのような、日本の側からはたらきかける例もみられる。新羅関係話の特徴づけるこれらは、あきらかに伝法・定着の枠を越えている。というより、ここには、新羅を越えたいと願う日本、あるいは、越えたと主張する日本が語られているわけで、高揚した気負いがその背後にあるものとみられる。数は少ないけれど、こうしたはなしがみられることは、留意してよいだろう。

仏教とは無縁だが、商売のために新羅へ渡ったとする二九31も、新羅との関係が、もはや待つだけ、受け入れるだけの状況ではない、との認識を反映したもののように見える。

十一一、十九31と、高麗人による仏教の伝来・定着にかかわるはなしを有する高麗のばあいも、そのうちの十九31は高麗からの渡来僧を主人公としている。また、戦乱に遭遇したために唐に逃れ、結果的には目的を達することはできなかったけれど、日本からの留学僧を主人公にした十六1も、高麗関係話のなかの伝法譚のひとつに数えてよいだろう。

高麗はしかし、主題とからまなやかたちで登場することがおおく、個々のはなしへの参加の度合いという点になると、百濟、新羅の兩國に比して、いちじるしく低い。

たとえば十二・九・一〇・二二、三一・二では、法会等の舞人あるいは楽人として高麗人が登場しているにすぎないし、十七・三三、二二・七、二四・三一、三二・三〇では、調度としての高麗端の暈が、また十一、十一・六、三一・二一などでは、旅の目的地、あるいは遠隔地の比喩として高麗の名がとりあげられているにすぎない。つまり、はなしの周縁部分に、高麗の、それも非本質的な部分がはめこまれている、といった構図なのだ。高麗の語を有するはなしがおおいわりには、さしてみるべきものはない。これが、高麗関係話の特色といえはいえようか。

なお、「今昔物語集」でいう〈高麗〉とは、おおむね高句麗のことだと理解してよさそうだ。「今昔物語集」の成立は、王建による高麗の建国（九一八）からおおよそ二百年たった、いわゆる高麗時代なのだが、その高麗である可能性はほとんどない。

六六八年、新羅によって滅ぼされた高句麗を日本で〈高麗〉と呼んだことは、高麗建国以前に成立した文献、たとえば「日本書紀」「懷風藻」「靈異記」等に、その用例がみえることよってあきらかだ。

また、高麗建国の四十余年前の成立である「日本国見在書目録」（土地家）にも、「高麗国記」との書名がみえる。同書が今日に伝えられていないので内容はわからないが、この記事に誤脱がないとすれば、高句麗を〈高麗〉と呼ぶことは、日本だけにみられる現象

「今昔物語集」の三韓

ではないということになる。いずれにしても、日本では〈高句麗〉よりも、〈高麗〉の方がなじみのある呼称だったようだ。

「今昔物語集」にもどって、具体的に述べよう。

十六・一は、日本からの留学僧を主人公とするはなしであり、十九・三十一は、功德をほどこした渡來僧を主人公とするはなしである。両話とともに、主人公の留学先き、あるいは母国について〈高麗〉とされている。しかしその〈高麗〉は、両話の出典である「靈異記」の上・七、および上・十二の当該部分に、すでに求められる。そこでも〈高麗〉となっているのだ。「靈異記」の成立年代については、論者によってなお多少見解のゆれがあるが、弘仁十三年（八二二）からほど経ぬ時期であったとする点ではほぼ一致しており、当面のもんだいに関していえば、大勢に影響ない。

十二・二二、二二・七、三一・二の三話は、高麗建国後の出来事ととりあげたはなしだ。しかし、だからといって、これも高麗だと限定してよいとはかぎらない。なぜなら、「唐高麗ノ楽人」といった表現は、現実の歴史の展開とかかわりなく、一種の慣用語として用いられている可能性が強いからだ。たとえば、十二・二二は寛仁四年（一〇二〇）の出来事であり、唐の滅亡から百年の余を経ているにもかかわらず、「唐高麗」としている。〈宋高麗〉とはしていない。

同じような例は、十二・九にもみることができる。これは貞観二年（八六〇）の出来事であり、高麗の建国に先立つこと五十余年。だが、ここでは「唐高麗ノ舞人楽人」としている。「唐新羅」ではないのだ。

しかし、書名の類似性からみて、それを意識することなくつけたものとは考えにくい。その影響が、かりに作品の内部にまでおよんでいないとしても、命名に際して景戒は、中国渡来の「靈異記」を念頭においていたにちがいない。念頭においたうえで、これはまさしく「日本」の「靈異記」なのだ、彼は直言しているのだ。書名に冠した「日本」は、単に、彼我の「靈異記」の区別のための符号ではあるまい。

「靈異記」の関心は、もっぱら中国に向けられている。くりかえすことになるが、編集の動機がそもそも中国の著作に触発されたことによるものだったし、したがって、そこで醸成された強い自国意識も、とうぜん中国を基点としている。

三

発想の基盤を中国の著作におく、こうした「靈異記」の方法は、強い影響力を持っていた。自国意識に若干強弱の差はあるものの、「日本往生極楽記」「本朝法華伝記」「本朝神仙伝」等の後代の作品に、この方法は継承されている。

たとえば「日本往生極楽記」は、唐の「浄土論」「瑞応伝」に啓発されて、日本の異相往生者の伝をあらわそうとした慶保胤が、「国史及諸人別伝等」から材を集めた編んだものだ。「日本往生極楽記」は、唐の著作に欠落している日本に関する部分を補充しようとしている。

「本朝法華験記」は、伝本によって書名に若干のゆれがあるけれど、これも序の示すところによれば、唐の義寂の撰になる「験記」、

「今昔物語集」の三韓

すなわち「法華験記」を一見におよんだ鎮源が、日本に同趣向の著作のないことに一念発起して編んだものだった。

上十、下九六・一〇五・一〇六・一〇八の四話には、話末に「出雲異記」「見雲異記」等の注記がそえられている。もともと、どうやらこれらは「靈異記」からの直接をもつてこれたのではなく、「三宝絵」を経由してのものようだ。だが、影響はかりに間接的なものであるにしても、唐の著作に刺激され、それに対応する日本の作品を編もうとした「本朝法華験記」の姿勢は、やはり「靈異記」の延長線上にあるということになる。

「本朝神仙伝」の発想の基盤も、中国の著作におかれている。これが「日本国見在書目録」（雑伝家）にみえる葛洪撰の「神仙伝」に触発されて編まれたものであろうことは、諸家の指摘するところだ。^(註3)「本朝神仙伝」には、「靈異記」「日本往生極楽記」「本朝法華伝記」などのように序文は伝えられてはいないけれど、意図するところは本文からあきらかだ。

さて、「今昔物語集」は、「靈異記」はもとより、「日本往生極楽記」も「本朝法華験記」も、本朝仏法部の主要な資料として用いている。資料として用いるに際して「今昔物語集」は、これらの作品を個々のはなしに解体したうえで、みずからの論理によって再構築した。

もんだいはこのとき、「今昔物語集」の目がどこに向けられていたかという点だが、巻六、巻七の資料として用いた「三宝感応要略」から、その組織法や標題の形式等を導入した「今昔物語集」のことだ、資料として用いるに際して、それらの集合体としてのあり

ように無関心であったはずはあるまい。まして「靈異記」等には、「三宝感応要略録」とは違って、編集の動機や経緯にふれた序文が付けられている。関心は集合の様態だけでなく、集合への契機にも及んでいたとみるべきだろう。というより、中国の著作に触発され、そこから醸成されていった「靈異記」等の自国意識から目をそらすなどということは、「今昔物語集」にとつてはむしろ、至難のわざだったにちがいない。そういう状況にある。

要するに、「今昔物語集」もまた、中国の著作に触発されて成立した「靈異記」以下の作品の流れの中に、身をおいているのだ。顔は中国に向いている。

四

「靈異記」にその成立をうながしたものとして「冥報記」や「般若験記」があったように、「日本往来極楽記」に「浄土論」や「瑞応伝」が、また「本朝法華験記」に「験記」があったように、「今昔物語集」には「三宝感応要略録」や「冥報記」があった。とりわけ「三宝感応要略録」は、素材源としてだけでなく、「今昔物語集」の成立に深く関与しているとみられる。「三宝感応要略録」なくして「今昔物語集」が成立したとは考えにくい。

しかし、「靈異記」等の先行著作に対する対しかたと「今昔物語集」のそれは、あきらかに違っている。

すなわち、「靈異記」等は中国の先行著作を、日本の立場から補充するにとどまっている。右にふれたように、これらは自国意識の発現の一方法として編まれているとみられるのだが、自国意識に支

えられていなければならないほど、みずからが書名に冠した（日本）からのがれられないわけで、宿命ともいえるほどに補充の役割はついてまわることになる。

たとえ先行著作に対抗する意図をもっていたとしても、もともと発想の基盤を同じうしているのだから、それを越えることはとうてい不可能なのだ。内容の出来不出来はともあれ、どこまでいっても同一次元での営みでしかない。

それに対して「今昔物語集」は、啓発された「三宝感応要略録」等を、みずからのなかに取り込んだ。先達としての「靈異記」等さえも、吸収してしまった。

補充から吸収へ。「靈異記」等における先行著作との関係と、「今昔物語集」のそれとは、おおきく様変わりしている。先行著作に対する力関係が違っているのだ。「今昔物語集」にとつて「三宝感応要略録」等は、けつして対応する関係にはない。

なお、ここで対応というのは組織のうえでのことではない。組織ではすでに指摘されているように、きつちりと対応している。もんだいはその対応の趣旨なのだが、「今昔物語集」は「三宝感応要略録」の組織法を導入し、それを「三宝感応要略録」のためにではなく、みずからのために活用している。

「今昔物語集」は、包み込むことによって「三宝感応要略録」等の先行著作を越えている。それらは「今昔物語集」の成立に際してさまざまな示唆をあたえはしたけれど、ひとたび構想が具体化したときには、もはや努力目標としての位置にさえとどめられてはいないのだ。

君〕に支えられて日本での仏教が隆盛をきわめているというのは、
相對評価なのだ。

天竺、震旦での仏教を、衰退していると推定することの根拠が歴
史的にみて正当であるかどうか、あるいは、推定の結果が当をえた
ものであるかどうか、といったことがこどもんたいいなのではない。
先進国としての天竺、震旦の仏教が衰退し、それにひきかえ日
本では隆盛をほこっているという論のすすめかた——別のいいかた
をすれば、認識そのものももんだいなのだ。

五

「三宝絵」の成立に先立つことおよそ九十年の寛平六年（八九
四）、遣唐使の発遣がとどめられた。在唐の留学僧中権の報告にも
とづいて、このとき菅原道真のしたためた遣唐使停止の奏状には、
「大唐凋弊」の語がみえる。（金巻）

これはむろん、あくまでも当時の政治、および社会情勢一般につ
いての評価だろう。しかし、それまでほとんど絶対的でさえあった
唐の影響力に水を差したという点において、この指摘のもつ意味は
重い。

世が変わって宋になつてからも、宋とのあいだには、公私にわた
ってさまざまな接触があった。齋然、寂照、成尋らが留学している
のもそのひとつだし、宋から日本への接近をはかる試みも何度かあ
った。だが、ついに〈遣宋使〉は復活しなかった。

かつてのように追隨するのではなく、距離をおいて接するべきだ
との認識が一定の力をもっていたことのこれは反映なのだろう。

むろん、宋から学ぶべきことは、なお少なくなかった。そういう
立場にたっていた人びとも、一方にはあった。さしずめ寂照や成尋
らはそうだ。学ぶべきことが少なくないと判断したからこそ、彼ら
は宋に留学したのだ。

ところが、留学中のエピソードを伝えるはなしになると、うって
かわって日本優越論で色着けされている。たとえば寂照のばあいは
こうだ。

国王から、鉢を飛ばして僧供を受けるように命じられたときのこ
とである。いまだ飛鉢の法を修めていなかった寂照は、途方にくれ
て日本の三宝に祈念した。すると彼の鉢は、みごとに飛んだ。飛ん
だばかりでなく、先に飛ばした宋の僧たちの鉢よりも早く僧供を受
けて帰ってきた。国王はりっぱに対処しえた寂照の実力を認め、以
後、彼をあがめ尊ぶとともに、深く帰依したという。

寂照に従って入宋した弟子念救が、帰国後に語ったものだと注
記を添えている。「今昔物語集」一九二「参河守大江定基出家語」
は、さらに五台山での、瘡を病む女をめぐる宋の僧と寂照との対応
の違いに関するエピソードを紹介している。ここでもとうぜんのこ
とながら、寂照の判断の方が、より適正だったことになっている。

なお、飛鉢の一件は「続本朝往生伝」にも、ほぼ同趣旨の記事が
収められている。そしてその末尾には、

異国の人、悉くに感涙を垂れて、皆曰く、日本国は人を知ら
ず、齋然をして渡海せしめしは、人なきを表すに似たり。寂照
をして宋に入らしめたるは、人を惜しまざるに似たり、云々と
いへり。
（日本思想体系の釈文による）

と、『今昔物語集』のばあいに通じる、宋の人びとの反応が考えられている。

「続本朝往生伝」のこの発言は、作者大江匡房が、寂照の従兄弟の曾孫であることによる身びいきの讚美である可能性もある。額面通りに受け取るとはひかえねばなるまい。

それにしても、唐や宋に追いつき、追い越したという認識があり、そうした認識に支えられたはなしが存在するという事実は、確認しておく必要があるだろう。

こうした認識は客観的ではないかもしれないし、劣等感の裏返しにすぎないのかもしれない。だが、もんだいは、そうした認識に支えられたはなしを生み出す土壌が、たしかに存在していたという事実なのだ。

六

唐、宋に対してられるのと同様な状況は、新羅、高麗に対してもみとめられる。たとえば、高麗返牒と称される一件がそうだ。

承暦四年（一〇八〇）、医師の派遣を求める牒状が高麗からもたらされた。これへの対処をめぐって賛否両論があり、二度の陣定でも結論は持ち越された。決着は、けつきよく、関白師実の決断によってつけられた。『師記』および『水左記』によれば、師実の夢に故頼通があらわれて、派遣の無用を説いたからだという。とまれ、高麗からの要請を日本は拒否した。

要請拒否の返牒は、命じられて大江匡房が筆を取った。しかし、むろんその理由を、夢想によると書くはずもない。返牒には、牒状

『今昔物語集』の三韓

の文言の故事にもとる不適切なることと、格別の使者をたてることとせず、往反の商人に牒状を託したことの不都合なることを、拒否の理由としてあげている。要請に正面から応えず、形式の不備をもんだいにして、いわば玄関払いをしたわけだ。

拒否の真意が奈辺にあつたかは、いまひとつ不透明だ。しかし、先例を持ち出して要請を拒否するという論理構造は、高みからの発想にほかなるまい。高麗ばなれというよりも、高麗への優越意識が、暗黙の了解として、その背後にあつたとみてよいだろう。

高麗への優越意識は、しかも、派遣否定論者の側だけにあつたのではない。たとえば、『師記』の筆者源経信は、国際関係への配慮を重視する立場から医者派遣を肯定しようとしているのだが、彼の^(注7)高麗認識もまた、

抑高麗之於本朝也、歴代之間久結盟約、中古以来朝貢雖絶、猶無略心

というものだった。友好関係を維持すべきだと主張も、対等の関係においてではなく、高みから発せられているのだ。

十六九「新羅后国王咎得長谷観音助語」は、このような高麗返牒に象徴的に示されている優越意識の風土のなかで生まれ、そして育つていったものにちがいない。

みずからの犯した罪を国王から責められている后が、はるかなる日本の長谷観音に祈念して苦をまぬがれるという設定は、長谷観音の靈験のあらたかなことを説こうとするものであり、じじつ、このはなしは、靈験譚として伝播したわけだが、靈験が遠く外国にまでおよんだということもさることながら、およんだ先が先進国であつ

た点が、このはなしの眼目なのだ。距離だけがもんだいなのなら、〈遼国〉や〈異国〉でもよいだろうし、具体性がほしいのなら〈胡国〉とか〈琉球国〉とかいう方法もあつたはずだ。しかし、それではこのはなしでめざしている目的は達せられない。

ちなみに、十六九の類話を収めている『長谷験記』には、「吉備大臣於大唐野馬台扁朝語」（上）など、外国に靈験のおよんだとするはなしが五話ある。十六九の類話が新羅であるほかは、対象国は梁と唐。梁や唐や新羅だからこそ、これらのはなしは享受者に対して衝撃力と説得力とを持ちうるのだ。

『東寺王代記』によれば、高麗返牒の二十五年後の長治二年（一〇五）、覺行法親王の命を受けた太宰帥藤原季仲は、高麗から『釈論通玄鈔』四巻と、『釈論贊玄疎』五巻とを高麗から将来してゐる。たてまえとしての優越論とは別に、高麗は日本への仏教の供給基地として、なお機能していた。してみれば『今昔物語集』は、たてまえの世界に立脚していた、ということなろうか。

七

中国に対する優越意識は、中国に関するはなしの排除を意味しない。同様に、三韓に対する優越意識も、三韓に関するはなしの排除を意味しない。

排除どころか、三韓に関するはなしについていえば、むしろ可能な限り収められている、というべきだろう。たとえば『靈異記』所収の三韓関係話は、『今昔物語集』にはすべて収められているし、『三宝感応要略録』の三韓関係話もすべて収められているのだ。

たしかに、話数は少ない。すべてとはいえず、前者は十話、後者にいたってはわずか二話しかない。しかし、たとえ話数は少なくとも、それぞれに収められている三韓関係話のすべてが『今昔物語集』に採録されているという事実のもつ意味は重い。

三韓関係話は、三韓関係話のゆえをもって排除されてはいないのだ。組織原則の明確にうちだされた『今昔物語集』だから、あくまでもその組織原則に適合しているという条件を満たしていることは必要だが、そうしたものがあつたばあいは採録したのであるうことを、こうした事実は示唆しているはずだ。

にもかかわらず三韓関係話はきわめて少ない。ということとは、『今昔物語集』の編者の手の届く範囲に、独立した部位を構成するほどの量の三韓関係話が、届いていなかったことを意味しているにほかなるまい。

自国意識と、その延長としての三韓意識によって、震旦部の一部に組み込まれた可能性は、むろんあるとみななければならないだろうけれど、『今昔物語集』の編者のふれえた三韓関係話がきわめて限られたものだったとみられる点を、いまは重視しておきたい。

『今昔物語集』の編者のもとに三韓関係話が届いていない理由としては、さしあたりふたつ考えられよう。ひとつは、三韓の側に、『今昔物語集』が用いるにたると判断した資料がなかったばあいだ。現在確認出来ないから当時もなかったとはいえないけれど、その逆もいえないわけで、この点は留保せざるをえない。そしていまひとつは、『今昔物語集』の側の資料収集能力の限界だ。『今昔物語集』は、あの『法苑珠林』や、梁、唐の両『高僧伝』でさえも、

資料群のなかに加えていない。^(注8) これらはすでに将来されていたことが、『日本国見在書目録』等によって確認できる。内容的にも、じゅうぶん資料として用いるにたるものだ。にもかかわらず資料として用いてはいない。『今昔物語集』の資料収集体勢や能力は、決して万全ではなかった。資料の収集範囲は意外なひろがりをもせる一方、思いもよらない開塞状況をみせてもいる。したがって、三韓の側にしかるべき資料があったとしても、それがかならずしも『今昔物語集』の編者の視界にはいつているとはかぎらないのだ。

注1 片寄正義 『今昔物語集の研究』下(芸林舎 昭49年刊)

注2 佐々木一雄 『法華験歌成立考(その一)』(日吉論文集 昭35年)

注3 川口久雄 『古本説話集』神仙伝解説ほか

注4 国東文麿 『今昔物語集成立考』(早大出版部 昭37年刊)

注5 前田雅之 『今昔物語本朝仏法伝来史の歴史叙述』(国文学研究 昭59・3)

中井克己 「『三宝絵』の時代」(『中世説話とその周辺』国東文麿編、明治書院 昭62年刊)

注6 『菅家文章』

注7 小峯和明 「大江匡房の高麗返牒」(『中世文学研究』昭

前田雅之 「『今昔物語集』の〈国家〉像」(『中世説話とその周辺』)

注8 拙稿 「今昔物語集と法苑珠林・再説」(『日本文学研

『今昔物語集』の三韓